

教育長賞

中村 有希 (なかむら ゆき) 由木中央小 3 年生

作品名:「ガラスのうさぎ」を読んで

図 書:ガラスのうさぎ

わたしは、ひどい、悲しいと思いました。

なぜならせんそうで、主人公の敏子のお父さん、お母さん、妹が死んでしまうからです。

読んだきっかけは、せんそうの話をしたときに父が「有希はしあわせなんだぞ」とこの本のことを言っていたからです。

この本は、実話だそうです。しあわせにくらす日じょう、せんそう中のひげき、せんそう後の希ぼうという三つの部分からなります。

さいしょ、敏子は家族としあわせにくらしています。敏子はわたしと同じごくふつうの小学生です。敏子のお父さんは、ガラス工場をいとなんでいて、ガラスのうさぎのおき物を作っています。また、やさしいお母さん、へいたいに行っている二人のお兄さん、かわいい二人の妹がいます。わたしもきびしい父とやさしい母、年がはなれた弟がいます。わがままを言ってしかられることが多いですが、楽しくくらしています。敏子と同じです。

でも、せんそうがはげしくなり、くうしゅうでお母さんと妹二人がなくなりました。家のやけあとからは、とけたガラスのうさぎが見つかりました。とてもあつかったことでしょう。ひげきはそれだけではありませんでした。お父さんも、駅できじゅうそうしゃをうけて死んでしまい、敏子は一人ぼっちになってしまいました。わたしはむねがおしつぶされそうにかんじました。敏子は、自さつしようをしました。わたしも同じようにしてしまいそうです。一人で生きるよりも天国で家族といっしょにいたいです。でも敏子は思いとどまりました。家族の顔がうかんで家族のためにも生きようと思ったのです。敏子は強い子です。わたしも強くなりたいです。

せんそうがおわってへいたいに行っていたお兄さん二人が帰ってきました。ほっとしました。これで敏子はひとりぼっちではありません。強く生きようとしている敏子への家族からのプレゼントだと思いました。お父さんのガラス工場を作り直す

というゆめはけっきょくかないませんでした。敏子はえらいと思いました。今のわたしではまねできません。

とけたガラスのうさぎは、しあわせ、せんそうのこわさ、へい和と希ぼうを表してると思います。今年、日本はせん後七十年と聞きました。その間せんそうがなく、へい和です。でもこの本のさい後には「今も世界のどこかでせんそうでつらい思いをしている子どもたちがたくさんいるのよ」というセリフがあります。わたしはふつうの生活ができて、わがままいいたいほうだいです。「有希はしあわせなんだぞ」という父の言葉が少し分かった気がします。今の気持ちもわすれて自分かってになりおこられることもあると思います。しかし、敏子の家族のようにせんそうでぎせいになった人たちのことを考えて、今のしあわせにかんしゃして、家族仲よくしっかりとくらしていこうと思いました。